「津国女夫池」三段目小考

――『一夜船』との比較を手掛りに――

有澤知世

はじめに

近松門左衛門の浄瑠璃「後太平記／四十八巻目　津国女夫池①」（享保六年〈一七二一〉二月十七日大坂竹本座上演。以下「津国女夫池」と記す）は、本来全四十二巻である『後太平記』の四十八巻目と設定されており、足利義輝の暴虐と三好長慶の姦計により陥った足利幕府崩壊の危機を、足利義昭を立てる浅川藤孝らが復興するという筋立てである。

本作の三段目は、全体の筋立てと緊密な関りを持つわけではないとされながらも、晩年の近松が描いた「悪の悲劇②」として注目されてきた。

三段目は、足利家の忠臣・冷泉三木之進と滝川夫婦が、実は生き別れの兄妹であったと知った苦しみが描かれた後、三木之進の親父・文治兵衛の長台詞の中で、文治兵衛が過去に犯した罪が明かされ、最後には、彼とその妻が池に身を投じて悲劇的な死を遂げる、というものであり、文治兵衛の告白のくだりは、歌舞伎「けいせい石山寺③」（宝永四年〈一七〇七〉京都亀屋座初演）の二段目を典拠とすることが従来指摘されている④。

先行研究においては、「けいせい石山寺」との大きな相違点として、過去の罪障を語る男の葛藤や結末の在り方があげられており、それらが晩年の近松の倫理観に基づく悲劇の表現であると評価されている。

たとえば、白石勝氏⑤は文治兵衛の造形について「人の心の悪が善との葛藤のうちに、内面的な悲劇として形成されている」とし、大橋正叙氏⑥は「それは晩年の近松が背信という悪に対して鋭い非難の目を向けていたことを示しているが、それでもなお、文次兵衛を心

ある人間に描いたのは近松の人間を見る目のやさしさであろう。」と述べる。

本稿では、これらの先行研究をふまえた上で、「津国女夫池」の創意を改めて評価することを目指す。

具体的には、浮世草子『近士武道伝来記』と『一夜船』に、「けいせい石山寺」をほぼ丸どりした話があることを指摘した上で、「津国女夫池」三段目と『一夜船』の比較を通して、文治兵衛の一度目の入水のくだりが、三段目を読む上で重要であることを述べる。

さらに、三段目で多用される「泥」「鼈」という語が、罪人のイメージを伴い、江戸の戯作者山東京伝の作品にも登場していることに言及する。

一　「津国女夫池」三段目と「けいせい石山寺」

ここでは、「津国女夫池」と「けいせい石山寺」の相違点を整理し、それらが先行研究において、どのように評価されてきたのかを確認しておく。

まずは、「津国女夫池」三段目の梗概を詳しく記す。便宜上、話題ごとにタイトルを付し、山括弧内に示した。

三好による謀反が起こり、身重の御台を伴い御所から逃げ落ちた冷泉三木之進・清滝夫婦は、三木之進の実家を頼る。三木之進の親父・文治兵衛は、清滝が、三好家の家老岩成主税の娘と知り忠義を疑うが、清滝はもと捨て子であったのを拾われたのだと弁解する。捨て子の証拠の守本尊を見た文治兵衛夫婦は、清滝が、かつて生活苦のため捨てた自分たちの娘であることを知り喜ぶ。〈清滝の出自判明〉

既に夫婦になっていた三木之進と清滝は、畜生道に墜ちたことを知りひそかに苦しむ。二人は死を決意して女夫池へ向かうも、文次兵衛夫婦が駆けつけたため、死に後れたことを嘆きながら潜んでいる。〈三木之進夫婦の苦しみ〉

文次兵衛は、三木之進と清滝は別腹であるため、死ぬことはなかったと嘆き、その理由を語り出す。三木之進の実の親は、文治兵衛の同輩駒形一学であり、母は三木之進を生んで七日後に亡くなったため、今の文治兵衛の妻である女を後添えに迎えた。ある時、一学は帰宅途中に何者かに斬りつけられ死亡する。文治兵衛は一学と同朋のよしみで、Ⓐ三木之進が十五になれば親の敵をとらせるという約束をした上で、未亡人となった一学の妻と夫婦となった。夫婦の間には清滝が生まれたが、敵討ちの大望ある三木之進を養育するため、清滝を捨て子とした。三木之進の出世を嬉しく思い、一学の敵討ちを日延べしていたが、

このようなことになってしまったという。Ⓑ文治兵衛は、約束を違えた罪を恥じ、女房には南都の叔父を頼るよう言い残して池に飛び込みかける。〈三木之進の出自判明〉

話を聞いていた三木之進が飛び出し、これまでの恩を謝し、親の敵の手がかりをたずねる。〈三木之進夫婦の苦しみ解決〉

文治兵衛は、一学殺害の犯人が自らであることを明かし、その経緯を語り始める。もともと、女（＝現在の文治兵衛妻）に恋をしていた文治兵衛であったが、文を渡す頼りもなく、そのうちに一学の先妻が亡くなったため、女はその後妻としてめとられてしまった。妬ましく思い一学を討ち、夫婦になったものの、苦しみを抱えながら二十年来の時がながれた。〈文治兵衛の罪の告白〉

文治兵衛は、三木之進に親の敵を討つよう迫るが、三木之進は葛藤し、刀を投げ捨てる。〈三木之進の葛藤〉

文治兵衛の妻が、一学の敵討ちとして文治兵衛に斬りつける。そして二十二年連れ添った夫を斬らねばならない武家の娘としての因果や、二人の夫を持った上に敵と夫婦になってしまったことを嘆き、入水する。〈文治兵衛妻の敵討ちと入水〉

文治兵衛も追って入水しようとするが、三木之進がその腕をつかんで留め、切腹を勧める。しかし、掴まれた腕の付け根を斬って入水する。〈文治兵衛の入水〉

右に示した梗概のうち、〈三木之進夫婦の苦しみ〉は「今源氏六帖」の趣向に由来する。そして、〈三木之進の出自判明〉〈文治兵衛の罪の告白〉が、「けいせい石山寺」二段目に拠る内容である。以下、「けいせい石山寺」の梗概を記す。

樋口勘介という侍が、主君の命を受けた西国巡礼を終えて家に戻り、突然、妻・おそめ、息子・三之助、娘・おしまと盃を交わして形見分けを始める。〈形見分け〉

不審に思って訳をただすと、勘介は過去のことを語り始めた。昔、勘介が同家中の親友・忠太左衛門と夜咄をしていると、歌書の話題になった。勘介が小野小町の歌の上の句を口にすると、忠太左衛門の妻・おそめが下の句を詠んだ。勘介は、それがきっかけでおそめに惚れる。勘介は忠太左衛門を闇討ちにし、それを黙ったまま忠太左衛門の弔いの世話を焼く。そして当時二歳の三之助を抱えたおそめを娶り、娘・おしまを設けたのだった。〈勘介の罪の告白〉

しかし、このたび高野山に参詣したところ、人を殺した罪が重いために無明の橋の柳が大蛇になり橋が渡れず、物笑いと

なったことを恥じ、発心して山を下ってきたという。〈高野山の怪異〉

勘介は三之介に自分を討つように言うが、おそめは三之介を止める。〈おそめの敵討ち阻止〉

三之助は、勘介を討つことをやめる。〈敵討ちの中止〉

主君のために、娘・おしまを五百両で売ったことを明かし、勘介は出家する。〈勘介の出家〉

両話は、男が、昔自分の親友を闇討ちにし、その妻を娶ったことを懺悔するという点と、親友の息子を養育しながら、妻との間に娘を設けたという点が共通している。

その一方で、「はじめに」でも述べたように、友人を殺してその妻を娶った男に葛藤があるかどうかという点と、罪の告白の後に男が死ぬかどうかという点が大きく異なる。また、過去が明らかになってゆく順番も異なっている。

これらの点について、先行研究ではどのように論じられてきたのだろうか。

まず、男の葛藤の在り方については、白石氏⑦が、女を娶った際の約束（「津国女夫池」梗概傍線Ⓐ）に注目して以下のように論じている。

心の葛藤として設定したのが、②bの再婚の時の（有澤注、梗概の〈三木之進の出自判明〉に相当）「十五にならば親の敵を尋求め討せてたべ、ヲ、討せんとの契約」である。それはいわば夫をうたれた妻と再婚する後夫の義理である。自分に敵討を課した文治兵衛は、ここに敵でありながら敵をねらう自己矛盾を生きることになる。「兄は生い先大望有大事の男子。」と実の娘を捨ててまでして養育せねばならないのである。（中略）（有澤注、「けいせい石山寺」の）勘介にはこの苦悩はない。（中略）勘介には先夫の敵討の契約は交わされていなかった。（中略）結婚については「とかく子がかはゆふござりますほどに、どふなり共との返事」とあるだけである。少なくとも勘介は表面だって自己矛盾を生きなくてよい。（中略）しかし、そこに善心との葛藤を設定しなかったことは、勘介をただ悪の立場からのみ描くことになる。内的な悪心追及の意図はない。先夫の敵討契約の設定の有無は、このように人間把握の根本的な差異となっている。

勘介との大きな違いとして、文治兵衛が完全な悪人ではなく、約束のために罪悪感をかかえて生きる人物として造形されているという指摘は、「津国女夫池」の評価の上で重要である。

また、男の結末の違いについても、文治兵衛の造形と関連付けて論じられている。内山美樹子氏[8]は、この点について次のように述べる。

「けいせい石山寺」では主人公が友人を殺す前に一度はためらったのに対し、「津国女夫池」の主人公文次兵衛ははじめ友人一学を殺すこと自体に何ら罪を感じなかった。（中略）が、その恋が叶った瞬間、文次兵衛ははじめて罪の意識を覚え、以来心の安らぎを全く失ってしまう。（中略）文次兵衛の人間としての自覚に基づく倫理観が、彼をして「けいせい石山寺」の場合のように、懺悔の後出家して普通に生きることを許さず

結末の違いをどう読むかについては、役者評判記「役者友三味線[9]」（宝永四年〈一七〇七〉三月刊）が示唆を与えてくれる。「けいせい石山寺」のおそめを演じた岩井左源太の評は、以下のとおりである。

先男の敵といふて、兄むすこ三之助にうたれんといふ時、三之助が袖をひかへ、今迄やういくせられし御おんが有、うつては立まい、ぜひ打気なら先おれを手にかけよといわるゝは、今の夫を引やうで先のおつとへの心ざしなし、先長刀でもおつ取、ともぐ〳〵妻の敵を討んと打かけながら、思へば今のなじみ皆我身にほれての悪じや物と、よいせりふ思ひ入の有さふな物じや

▲中組の頭　それは作者の気がつかぬといふ物

評判記は、三之助が勘介を討とうとするのを、おそめが止めに入っていることを非難しており、おそめこそが忠太左衛門の敵を討とうとすべきであって、しかもそこに、共に長年過ごした勘介との関係との葛藤に苦しむ描写があるべきだと述べている。

白石氏[10]はこの評判の趣旨に賛同しつつ、「勘介女房は初めからその情に負けてしまっており、三之介も父を助けるのは、この情との妥協である。（中略）これに対し、近松は評判記の指摘した方向を誤っていない。文治兵衛の悪は我が身に報うだけでなく、否応なく女房をも絶対的状況へつきつめていく」と指摘しており、近松が文治兵衛の妻の苦しみをも描いたことを評価している。

そして、過去が明らかになる順番については、白方氏[11]が以下のように論じている。

近松は文治兵衛の懺悔をまず第三者的な話しぶりで、まるで他人事のように語らせる。すなわち観客には肝心な一点を隠した

まま、一通り事件の経緯をかたって、兄妹夫婦の謎を解く。隠しておくのは後で一気に解決、逆転する手法である。しかし、そう言ったからとて、②の段階（有澤注、梗概の〈三木之進の出自判明〉にあたる）では、ただ事件が表面的に語られればよいというものではない。この時すでに文治兵衛の心の中では悲劇が進行しているのであって、それは彼の心底として語られなければならないのである。

白方氏の説に賛成しつつ、この構造について私見を述べると、三木之進が死んだと思った文治兵衛が、敵討ちの約束を果たせなくなったと思い入水しようとする点が重要で（梗概傍線Ⓑ）、後に、観客が知ることになる文治兵衛の罪悪感が、切実であったことを描くのに効果的であったと考える。この点については、三節で再び述べたい。

ここまで、「津国女夫池」における「けいせい石山寺」との相違点は、文治兵衛が抱えて生きてきた罪の意識と、その罪を明かさず暮らしていることで生じる葛藤、さらに女房の苦しみを描き得ている点で評価されてきたことを確認した。

二　「けいせい石山寺」と『近士武道伝来記』・『一夜船』

さて、「はじめに」でも述べたように、「けいせい石山寺」を利用していると思われる浮世草子作品を指摘したい。

月尋堂『近士武道三国志』[12]（正徳二年〈一七一二〉刊）巻三・一「大和国一対男」と月尋堂草稿・北条団水補筆『一夜船』[13]（正徳二年〈一七一二〉刊）巻二・四「人しれずこそ恋の梯」である。

以下、各話の梗概を記す。

『近士武道三国志』巻三・一「大和国一対男」梗概

外山数右衛門という侍が、主君の命により高野山へ参詣して帰宅する。妻子は喜ぶが、数右衛門は機嫌がすぐれない。女房・おみやは、数右衛門の道中に化物にあったことを案じなだめるが、出家の心があると言い、兄妹（勝之丞とおさつ）を呼んで形見分けをする。〈形見分け〉

数右衛門は、形見分けの理由を語り始める。女房おみやは元々、勝之丞の実父・勝左衛門の妻であった。数右衛門と勝左衛門は朋輩で兄弟同然の付き合いをしており、一対男と評判されていた。ある夜、勝左衛門の家を訪れた数右衛門は歌学の話におよび、壬生忠見の「恋すてふ」歌の音の清濁について議論

していると、堂上へ奉公していたというおみやが一説をのべる。帰宅してからもそのことが忘れられず、夫ある女房への恋慕に悩む。勝左衛門を殺して夫婦になろうとたくらみ、帰宅途中の勝左衛門を斬り殺した。その後、そしらぬふりをして勝左衛門の死をなげく。おみやが二歳の息子をつれて嘆く様子を見て、その手にかかろうかとも思うが、恋情が勝ち、親戚方へひきのいたおみやをときふせ、夫婦となった。夫婦仲良くおさつを設けたが、勝之丞が勝左衛門に似てくるにつれ、名乗ってうたれようと思い覚悟を決めていた。〈勝之丞の生い立ちと数右衛門の罪の告白〉

そのような時、主君の命で高野山に向かったが、過去の罪が重すぎるために御廟のもとの橋の柳が大蛇になるという怪異にあったため、すべてを僧に話して下向した。〈高野山の怪異〉

このようにすべてを話したからには武士がたたないため、勝之丞に自分を討つように言うが、勝之丞は葛藤する。〈勝之丞の葛藤〉

数右衛門は、女房には死なないように諭し、自らを刺して苦しみながら勝之丞に首をとるよう強く迫る。勝之丞は涙ながらに首を落とす。〈勝之丞の敵討ち〉

『一夜船』巻二・四「人しれずこそ恋の梯」梗概

昔、高管森左右衛門という男が、下城の折、闇討ちにされた。森左右衛門の弟・白右衛門が犯人を探しているが、未だ見つかっていない。森左右衛門には妻がおり、事件の後、その息子・森之丞を産んだ。森左右衛門の親友であった駒村友右衛門が、森之丞を抱えた未亡人と再婚し、Ⓒ森之丞が成人した暁には親の敵を討たせてやろうと約束する。その後、夫婦の間には娘が生まれる。〈過去の事件と子ども達の生い立ち〉

娘は十三歳、森之丞は十五歳になったが、いまだ敵は知れない。あるとき、友右衛門は主君の命をうけ高野山へ参詣する。帰宅した友右衛門は、森之丞に形見分けをし、家族に過去を語り始めた。〈形見分け〉

昔、友右衛門と森左右衛門は家中で一対男と称される程の仲であった。ある時、森左右衛門の家で夜咄をしていると、物ごしに、壬生忠見の「恋すてふ」の歌の音の清濁についての議論に言及し、三光院の説を述べる女の声が聞こえた。この声の主は、昔三条家に奉公していたという森左右衛門の妻であろうと思い当たり、それから恋慕の情に悩まされるようになった。友右衛門は悪念きざし、帰宅途中の森左右衛門を闇討ちにし、未亡人となった女を娶り、娘をもうけたのだった。〈友右衛門の

罪の告白〉

しかし、白右衛門や森之丞の無念さを思い、自分の悪心を悔いていた。このたび高野山に参詣したところ、過去の罪が重いために橋の柳が大蛇になるという怪異が起き、すべてを僧に話して下向した。〈高野山の怪異〉

このうえは、名乗って森之丞に討たれようと決意し、白右衛門も敵が見つかったことを知らせたと言う。知らせを聞いた白右衛門が敵の正体を聞くと、友右衛門はそれが自分であることを告げ、二人に敵を討つように言う。〈討たれる決意〉

森右衛門は親子の情にひかれて落涙する。〈森右衛門の葛藤〉

友右衛門は自らを刺す。白右衛門は、森之丞に介錯させ、自らも太刀傷をつけて本望を遂げる。〈森之丞と白右衛門の敵討ち〉

ここで二作品の関係について言及しておく。

『一夜船』は、『近士武道三国志』他、月尋堂作品数点を典拠に、月尋堂自身により再構成された作品であることが、藤原英城氏[14]によって指摘されており、『一夜船』「人しれずこそ恋の梯」も、『近士武道三国志』「大和国一対男」を元にして構成した作品である。

両作とも「けいせい石山寺」の趣向をほとんど丸どりしていると思われるが、共通する話の構成要素として特に重要なのは、以下の四点である。

① 高野山から帰ってきた男が、急に形見分けを始め、過去の罪障について語る。

② 親友との夜咄の際、その妻が歌論を述べるのを聞いたことがきっかけで、男がその女に惚れる。

③ 親友を闇討ちにして、後妻となった女を娶り、種違いの兄妹を養育する。

④ 高野山・無明の橋の柳が大蛇となる怪異に遭遇したことが、過去の罪を告白するきっかけとなる。

一方で、「けいせい石山寺」との相違点が、次のように指摘できる。

⑤ 女に惚れるきっかけとなった和歌が、「けいせい石山寺」では小野小町の和歌だが、『近士武道三国志』と『一夜船』では壬生忠見の和歌であること。

⑥ 『近士武道三国志』と『一夜船』では、男は出家するのではなく、自らを刺した上で息子に討たれて死ぬこと。

⑦　過去が明らかになる順番（『一夜船』のみ）。
⑧　敵討ちの約束の有無（『一夜船』のみ）。
⑨　殺害された男の弟の存在（『一夜船』のみ）。

⑤は、作者月尋堂が歌学に通じ、堂上方に出入りがあったこと、忠見の歌と恋を結びつけるという趣向が、月尋堂の他作品にも見られるという指摘[15]があり、月尋堂らしい改変であると考えられる。

⑥については、『近士武道三国志』が武家義理物であるため、全体の趣旨に即して改変したのだろうが、先に挙げた評判記「役者友吟味」で評判されているように、「けいせい石山寺」の結末を物足りなく感じ、読者が納得できるような形に改めた可能性があるだろう。

そして⑦⑧⑨は、『一夜船』のみに見出される相違点である。

まず、⑦の過去が明らかになる順番だが、「けいせい石山寺」と『近士武道三国志』においては、殺害に至った経緯や子供の生立ちが、男の懺悔の中で一気に明らかにされる。しかし、『一夜船』においては、最初に、過去の事件のみが語られ、殺人の犯人は不明とされる。そして男が始めた懺悔の中で、初めて過去の事件の全容が明らかにされ、最初に提示された過去の物語が覆されて、読者に驚きを与える仕掛けになっている。

⑧は、冒頭で事件について示された際、友右衛門が森之丞が成人した暁には父の敵を討たせてやることを約束したという内容であり（『一夜船』梗概傍線Ⓒ）、読者は、森之丞が敵討ちを志していることを最初から知らされている。[16]

また、⑨は、森左右衛門の弟・白右衛門が長年兄の敵を探しており、遺児・森之丞とともに友右衛門を討つ点が、「けいせい石山寺」・『近士武道三国志』とは異なる点である。

興味深いことに、「津国女夫池」と「けいせい石山寺」の違いとして先行研究で論じられていた点が、右に述べた⑦⑧と共通しており、「津国女夫池」は「一夜船」と近い要素を持つことが指摘できる。

最初に犯人不明としながら過去の事件が語られ、後に敵判明と知らされた肉親（「津国女夫池」では三木之進、『一夜船』では白右衛門）が一瞬喜ぶも、その敵は…という展開も、両話に共通する筋運びである。

三　『一夜船』と「津国女夫池」

さて、「けいせい石山寺」から「津国女夫池」へという系譜に『一夜船』を補助線として加え、特に両話の相違点を手掛かりにすることで、「津国女夫池」の創意がより鮮明に見えてくる。

前節で述べたように、三木之進が死んだと思い、敵を討たせてやるという約束を果たすことがもはや叶わくなったと知った文治兵衛が、池に飛び込もうとするくだり（「津国女夫池」梗概傍線Ⓑ）は、三木之進が十五になれば敵を討たせてやろうという約束は、真実守るつもりではあったということを示しており、彼が二十年以上抱えてきた罪悪感の重さを物語る。

三木之進の立身を喜び「日比の存念一月延び一年延び。（中略）侍の本意を忘れ約束違へ」てしまっていたがために、敵を討たせることなく三木之進を死なせてしまったという後悔は、文治兵衛が、いつかは言わねばならないと思いながら、自らが敵であると告げることができずに平和な時間を過ごしてきてしまったという重い後悔でもあるのだ。

同様の約束を描く『一夜船』でも、友右衛門の長台詞の中で、「然るに此年月白右衛門が憤り。又は日比森之丞に云含めし上は敵の知ざる事。如何ばかり無念に思ふやらんと。朝夕心か、り。（中略）以前の悪心悔しき事。折ふしごとに思ひ続け」と、長年の後悔が告白されてはいるが、友右衛門に文治兵衛のような切実さは描かれていない。

大橋氏[17]が「その懺悔を導いたのは（中略）文治兵衛の登場より近松が随所に記す彼の性格、義者・行儀強き武士気質である。それは彼の苦悩の重さを見物に語りかけるに十分なものがある」と指摘するように、誠実な男・文治兵衛の罪と苦しみを描いたことが、「津国女夫池」三段目が、悲劇として注目されてきた所以であろう。

しかも、妻はその絶望を知らないため、文治兵衛の入水を「なふ狂乱か悲しや」と引き留める。一学を殺した二十二年前からこの瞬間に至るまで、文治兵衛だけがこの罪を抱えているのであり、観客にすら知らされていない。家族も観客も、その長く孤独な苦悩を後に知ることになり、そのことがさらに三段目の悲劇性を高めているのである。

ところで、文治兵衛の一度目の入水が、罪を告白しないままであったことは、どのように考えればよいのだろうか。

文治兵衛は、一度目の入水の際、敵討ちの約束を違えた自らを「人の皮着た野狐」とした上で、「是女房其方は人間也。我最期を見て前夫の敵を取て本望遂げたりと勇み。御台所若君に忠義弛まず。南都の叔父君を頼んで御運の到来を待べし」と告げている。

「是女房其方は人間也」と呼びかけたのは、妻をも畜生の道に落としてしまったその咎は自分にあるという宣言である。妻が敵を知れば苦しむことが分かっているために、文治兵衛は、秘密の上に成り立っていた二十二年の生活の罪は自分だけのものとして、ひとり死んでゆこうとするのである。

しかしその後、三木之進が生きて現れ、文治兵衛が二度目の長台詞の中で過去の罪を明かしたことで、結局は妻をも苦しみの底に落とし、死に追いやることになってしまう。大橋氏が「しかし、彼の懺悔によって救われるものは、文治兵衛の心以外に、誰もなく何もない」と指摘したとおりではある。

ただし、内山氏[18]が「彼の愛情が一学やかん介の場合のような単なる好色ではなく、ひたむきな誠実さを持つものであっただけに、彼は愛と倫理の相克に悩みぬかねばならなかったのである」と論じたように、「けいせい石山寺」にも『一夜船』にも描かれなかった、妻を同じ罪には落とすまいとする文治兵衛の在り方は、彼の妻への想いの深さを示す。三段目の最後で「しばしの敵も来世の女夫（中略）名は永き世の女夫池」と語られるように、近松は確かにこの二人を夫婦として描いたのである。

四　泥と鼈のイメージ

ところで、文治兵衛の台詞に、「泥」という語が多用されていることが印象的である。

たとえば、敵討ちの約束を違えたことを悔やむ文治兵衛は「時を延し日を延し一大事を怠り。今後悔の憂を見。浮世の泥に酔ふたる文治兵衛は四ッ足にも劣つて」と語り、池の底に沈んだと思われた三木之進たちの最期を、「不便や泥水を飲んで身を果せし」「廿間に足らぬ泥水の。主と成たる不便さよ」と嘆いている。

しかしその直前、入水して死ぬ覚悟を決めた三木之進夫婦は、「手に手を取て同じ水底同じ水が飲みたい」、「水に物は書かれねど心の誠をあらはせば。池文字は我書置ぞや」と述べており、「泥」という語は使われていない。むしろ、池は「心の誠」を示す書置きであると清廉なイメージを以て語られている。

それに対して、文治兵衛に繰り返し語られる「泥」という語により、池は悪に手を染めてしまった罪人のイメージを伴い、文治兵衛夫婦の死に場所となる。

近松が、泥を効果的に用いて罪を暗示した例としては、ほかに「女殺油地獄」の野崎の場で、与兵衛が投げた泥が小栗八弥の着物や馬具を汚すくだりがあげられよう。そのことが与兵衛の伯父の森右衛門を辞職に追いやり、与兵衛が罪を犯す一因となる。

さらに、妻の後を追って入水しようとする文治兵衛の台詞「男を害し其妻を娶る畜生残骸の此体。焼くな埋むな鼈の。餌食になれ」は、「吾れ死なば焼くな埋むな野に晒せ痩せたる犬の腹肥やせ」をかすめたもので九相詩を思わせ、水底で鼈の餌となるという凄絶な最期は、「泥」のイメージと共に、犯した罪の重さをつきつける。

「津国女夫池」三段目の趣向を利用した曲亭馬琴の読本『月氷奇

【図】『ヘマムシ入道昔話』口絵

電子データのため不掲載

（東京都立中央図書館加賀文庫蔵。画像は新日本古典籍総合データベースによる。DOI: 10.20730/100130962）

泥九郎が去ろうとしたところ、藻の花の魂魄が池の中の鼈に還着して、小さな鼈が泥九郎にとりつき行かせまいとする【図】。この後も、泥九郎は藻の花の死霊に悩まされるのだが、次に示すように、ある晩再び鼈の怪異に襲われる。

ある夜、酒に酔ひて伏しゐたるに、大きなる鼈、小さき鼈を数多連来りて、泥九郎が身内に食付きければ、これに苦しみ、一腰を抜放して斬払ひけるに、やう〳〵鼈は消失せたり。

無念の内に殺された女の魂魄が動物に還着して敵を悩ませるという趣向は珍しくないものの、「泥九郎」は悪に手を染めて汚れるイメージが重なる名づけであるし、罪人が鼈にとりつかれるという怪異は、「津国女夫池」三段目の最後を思わせる趣向として指摘しておきたい。

おわりに

本稿では、浮世草子『近士武道三国志』および『一夜船』が「けいせい石山寺」を利用していることを指摘した上で、「津国女夫池」三段目と『一夜船』を比較し、「津国女夫池」と『一夜船』の構成は共通するものの、「津国女夫池」の文治兵衛の入水未遂のくだり縁』（文化二年〈一八〇五〉刊）では、この凄惨なイメージは踏襲されていないが、山東京伝の合巻作品において、罪人―泥―鼈の趣向[19]が印象的に用いられている。

『天竺徳兵衛／お初徳兵衛　ヘマムシ入道昔話』[20]（文化十年〈一八一三〉刊、歌川国直画）に、泥九郎という貪欲な男が、褒美目当てに、腰元藻の花を殺して死骸を池へ蹴り込み、彼女が届けようとしていたお初（藻の花の主人）の艶文を奪い取るというくだりがある。

が、彼の罪悪感の大きさや、妻への愛情を読み解く上で重要であることを指摘した。

本稿において、『一夜船』を「津国女夫池」の典拠と結論づけることはできないが、長谷川強氏[21]が

従来の如く浄瑠璃・歌舞伎より八文字屋本「時代物」へという一方的な影響関係を考えるのみでは不十分な事を示しているように思う。（中略）その逆の関係、浄瑠璃・歌舞伎への影響――この場合は主として一場面にはめこむ事の出来る趣向の提供という形ではあったようであるが、その影響をも考慮し、両者の相互関係を考えることは「時代物」の理解をより進め、また演劇史研究の面でも幾分の貢献をなし得る事になるのではないかと思う。

と指摘するとおり、同じ素材に拠った浮世草子を視野に入れ、新たな補助線を引くことで、近松作品を読み直し得ることを指摘し得たと考える。

また、文治兵衛の台詞に見られる「泥」と「鼈」の語に注目し、それらが文治兵衛の犯した罪の重さを示唆すること、そしてこのイメージが、京伝の合巻作品にも利用されていることを指摘した。

京伝が近松の「けいせい反魂香」を趣向としてしばしば利用することは、従来指摘されている通りであり、[22]近松作品利用の在り方については、引き続き考察する必要がある。今後の課題としたい。

注

① 『新日本古典文学大系92　近松浄瑠璃集　下』（大橋正叔校注、岩波書店、一九九五年）所収のテキストを参照。

② たとえば『日本古典文学大辞典』の「津国女夫池」の項目では、「三段目は文治兵衛の悪の因果がめぐって我身を滅す悲劇である。歌舞伎の趣向には寄っているが、単純な因果物語に終らせず、畜生道におちた夫婦が父親の告白をさそい出してくるという必然的な展開のもとに、悪の悲劇とした点に特色がある。それは近松晩年に多く仕組まれた悪の悲劇の到達点を示すものともなっている。」（白方勝項目執筆）と評価する。

③ 東京大学総合図書館所蔵霞亭文庫蔵本（請求記号：E22:776:950）を参照。

④ 白方勝「「津国女夫池」における悪の悲劇」（『国語国文』第35巻第11号、一九六六年十一月）以降、定説となっている。

⑤ 注④に同じ。

⑥ 注①同書「解説」（大橋正叔執筆）

⑦ 注④に同じ。

⑧ 内山美樹子「近松の悲劇性」（『日本文学』15、一九六六年二月）

⑨ 『歌舞伎評判記集成』第四巻（岩波書店、一九七三年）

⑩ 注④に同じ。

⑪ 注④に同じ。

⑫ 『古典文庫第六四一冊　近士武道三国志』（藤原英城編、古典文庫、二〇〇〇年）

⑬ 『帝国文庫　珍本全集』上巻（博文館、一八九五年）

⑭ 藤原英城「月尋堂の存疑書等について――「近士武道三国志」を中心に――」（『国語国文』60・10、一九九一年十月）

⑮ 注⑭に同じ。

⑯ 『近士武道三国志』では、勝之丞を連れて親戚方へ退いたおみやに、勝之丞は武士の子であるのに百姓になるのは不憫だということと、万一親の敵が知れたときには討つためにと言い聞かせ、再婚するよう諭している。

⑰ 注①同書の注。当初滝川の出自のため彼女の忠心を疑い、斬ろうとした点等を指しての指摘と考える。

⑱ 注⑧に同じ。

⑲ 「国姓爺合戦」では、梅檀皇女を狙う敵方の降達という男が海に落ちて逃げてゆく様が「泥亀の、泥を泳ぐがごとくにて」と、鼈に喩えられている。

⑳ 『山東京傳全集　合巻6』（べりかん社、二〇一五年）

㉑ 長谷川強「紀海音の浄瑠璃に及ぼしたる八文字屋本の影響――「鎌倉三代記」「傾城無間鐘」について――」（『国語と国文学』38・9、一九六一年九月）

㉒ 金美眞「『女模様稲妻染』と大津絵の趣向――三馬・京伝合巻との比較を通して――」（『柳亭種彦の合巻の世界――過去を蘇らせる力「考証」』若草書房、二〇一七年）、有澤知世「京伝合巻における古画――『籠釣瓶丹前八橋』・『糸桜本朝文粋』を例に――」（『上方文藝研究』15、二〇一八年六月）等。

〔付記〕本研究は、科学研究費助成事業（若手研究　課題番号：22K13036）による成果の一部である。